

地域通貨が教えてくれること

商店街と地域社会との新しい関係づくりに向けて

地域づくりの5つの知性

先週、東京のある大学でシンポジウムがありました。そのシンポジウムのタイトルは「環境創造フォーラム」で、地球環境を考えて循環型社会をつくっていくというものです。スペシャルゲストではグンター・パウリさんというスイス人の方なのですが、世界の環境の将来を語る3人のリーダーのうちの1人とされている超有名人です。そこでパウリ氏が話されたことの中に、これからの21世紀に必要な能力は、5つの知性だという話がありました。

1つ目がアカデミックナレッジ、これは学問の知識ということですが、これが基本なのは容易に理解できます。でも、面白いのは次からです。

2つ目に挙げたのはエモーショナルインテリジェンスと言っていました。情熱のあるインテリジェンス(知性)です。

3つ目にくるのがもっと驚きなのですが、アート、芸術だということでした。

ここには、絵画や演劇、あるいは食の世界でも、芸術といえる境地があるでしょうし、いろいろなタイプの芸術があると思いますが、何か人の心を打つようなものが必要だと言っているわけです。

それから4つ目がシステムの考え方です。システムといってもコンピュータシステムのことでなく、全体を見る力、総合性、体系性と考えられます。

実はパウリさんは2年前まではこの4つ目までを求められる知性と言っていたそうです。ところが最近、それにもう1つ加えて5つの知性としたのです。

最後に加えたのは何かというと、英語でいうとキャパシティ・トゥ・インプリメントといいますが、これは要するに実行力、行動力なんです。机上での計画はできますが、計画後の実行力、行動力がものすごく重要だということですね。

パウリさんは、世界各地で100件以上のゼロエミッションプロジェクトに携わっています。パウリさんの言葉が力を持つのも、実践が伴っているからなんですね。

これからの地域づくりというのは、地域の中のいろいろなつながりというのをつくっていくって、そして総合的に地域として活性化していくのだと思います。

環境問題を考えるには、個別の部品に注目するだけではダメで、全体を眺めて循環する仕組みをつくっていかねばいけません。同じようにコミュニティづくり、地域づくりにおいても、全体をネットワークして循環をつくっていくことが重要だと思います。そのときに求められるのは、今申しましたように、知識、気持ち、アート、全体性、そして実行力。この5つだということなのです。

地域通貨とは

これからお話させていただく地域通貨というものは、あくまで道具であって目的ではありません。地域通貨をやったからといって、やること自体にはもっともいいことはないのです。地域をどうしていくかが重要なのであって、そのときに地域通貨が道具として使えそうかどうかを、いずれご判断していただければと思います。

そうは言っても、地域通貨というものは、それなりの可能性、きっと何かいいことがある。それで「地域通貨が教えてくれること」と題して、これからお話をさせていただきます。

まずは、地域通貨の基礎的な知識、地域通貨とは何かということからお話させていただきます。

地域通貨はお金といってもお金ではありません。日本円とは違うわけです。

どこが違うかということ、日本円ではなかなか表現できないような価値、地域

独自の価値を表現するものだということでもあります。

では、地域通貨はどんな形をしているのでしょうか。その一つが紙幣方式です。例えば、カナダのトロントダラーでは、立派なお札があり、5トロントダラー、10トロントダラーなどがあります。日本国内の先行事例である滋賀県草津市の「おうみ」も紙幣方式です。通貨の名称は、近江商人の「おうみ」、旧国名から名づけました。額面は1おうみ、10おうみとなっており、琵琶湖の絵と、通貨を持つ人に向けたメッセージのようなものが書かれています。大きさは名刺サイズです。紙幣方式といっても、いろいろなサイズがあるわけです。

地域通貨は、紙幣だけではありません。通帳方式というものもあります。これは何を売るかというと、例えば、隣の家の草取りをしてあげて、いくら地域通貨を支払ったか、というやり取りを、金銭出入帳あるいは大福帳のような冊子に記録するわけです。

口座方式というものは、通帳方式に似ていますが、中央のデータベースや管理台帳で集中的に管理し、だれがいくらやり取りしたかを記録しておくというやり方です。

なぜ地域通貨が期待されるのか

このように見かけは様々な地域通貨ですが、なぜ地域通貨というものが期待されているか、あるいは期待できるのでしょうか。

現在、日本には地域通貨が300位あると言われていています。それを目的別に大きく分けてみますと、大体3つくらいになると思われます。

1つ目のコミュニティ志向型は、住民やコミュニティの参加者どうしが「できること」と「してほしいこと」とを交換するというこ



株式会社 日本総合研究所
創発戦略センター 研究員
嵯峨 生馬 氏

とが中心です。例えば自分は車の運転ができます。あるいは家で余った自家用の野菜だったら分けてあげられます、など、各自ができることをやり取りするという仕組みです。

2つ目がプロジェクト志向型で、地域住民の助け合いに地元の商店、企業が加わり、まちづくりの活動を行うということです。

例えば、地元の商店街があって、商店街の真ん中に蔵があり、蔵を守る活動の一つに蔵をみんなで修理して直していくという活動があります。そうすると、蔵の活動に、寄付とか出資が伴ってきますが、お金を出した方や活動に参加した方に地域通貨を渡したらどうか。ボランティアもあると思うんですね。地域通貨は、この町をよくする活動である蔵を修復する活動に参加した人が持っているのだから、地元の商店も受け取ってにぎやかなか、という仕組みなわけです。ですから、1日蔵の修復に活動してもらった地域通貨は、地元の商店に行くと、例えば地域通貨を使って夕飯のビールが1杯サービスで飲めるとか、あるいは温泉が半額で入れるとか、そういう感じで、何かメリットを受けられる。そうすると、お金には換わらないですけども、地元で消費さえすればある程度メリットが出る。後で具体例を挙げますが、こういうモデルもあるということです。

それから、3つ目が経済循環志向型というふうなものです。

経済循環志向型では、すこし極端な例かもしれませんが、興味深い事例をご紹介します。これはスイスのWIRという地域通貨ですが、地域通貨といえぬくらい巨大で、第二通貨といえるようなものです。スイスにはWIR銀行というスイスの銀行法で認められた銀行があります。そこでは、例えば、私が嵯峨商店というものをやっているとして、銀行にお金を借りに行くとしましょう。普通、借りられるのは日本では日本円、スイスではスイスフランとなるはずですが、ここで借りられるのはWIRという地域通貨なんです。

一体そんなものを借りてどうするんだと思われると思うのですが、実はこのWIR銀行の顧客企業数は6万社くらいあるそうです。要するに地域通貨を

WIRで借りても大工さんでも水道工でも内装屋さんでも地域通貨が全部使える。

これは、今の日本の現実からすれば、かなり遠いという感じがあると思うのですが、地域通貨の中にはこういうものもあるということです。

コミュニティ志向型と経済循環型とでは、規模も目的も大きく違いますが、共通していることは何かといえば、地域の中で何かが回っているという状態をつくり出していることには違いがなさそうだということです。

内外の事例

それで、また少し事例の紹介に入りたいと思います。

これはアメリカのニューヨーク州のイサカという人口3万人くらいの町で流通するイサカアワーズという地域通貨です。アワーズというのは時間のことですが、1アワーズをお店で使うときは10ドルに換算して使うということです。これは換金性がありませんので、あくまでこの通貨は通貨としてぐるぐる地域の中を回るだけです。

イサカのまちなかでは約500の事業者が参加しているということです。

ただ、事業者によって地域の中で消費できる割合は変わってきます。ですから、例えばお一人様につき2分の1アワーズ(5ドル相当)まで使えますとか、そのような条件を定めて受け取って、残りドルで払ってくださいという受け取り方をしています。お店の前に「いくら地域通貨が使えます」というような張り紙がしてあります。

非常に身近な事例としまして、秋田県の「桃源」という地域通貨をご紹介します。

秋田県の北部、青森県に近い、白神山地の日本海側、能代の北にある峰浜村に、手這坂という小さな集落があります。手で這う坂と書きまして、手で這って登るくらい急な坂という意味だと思われそうですが、山に囲まれた4軒だけの民家がある小さな集落です。

その4軒はすべて無人、数年前から空き家になってしまったのですが、それらすべてが茅葺屋根で残されています。ご存知の通り、茅葺は人が住まないと傷みもげしく、実は、元々は5軒あったの

ですが、1軒は屋根の重さでつぶれてしまったようです。

そこで、どうしようかということで、地元の人が出せるお金を持ち寄りつつ、それでは足りませんから、そこで、外部のボランティアをうまく活用しようということになったそうなんです。そこで頼ったのが、秋田市内にある大学の建築関係の先生と学生たちで、こういう村があって、何とか環境を保存したいということをお伝えたら、結構お話を乗ってくださった。そこで、実際に建物の調査や、屋根の葺き替え、床の手入れなどをボランティアでやってもらった。

そのボランティアをした学生に配るのが地域通貨「桃源」なんです。峰浜村では、1日作業に参加すると1000桃源を渡します。1000桃源は何に使えるかというと、この周辺の地域に住んでいる方々がたまご餅という郷土料理を出してくれる。それを食べる時にこの1000桃源が使えるのだそうです。それからこれを3000桃源ためると、この民家に1泊できます。1人で3日間働いてもいいでしょうが、3人で一緒になって1日働いたら3000桃源ですから、グループで来ると汗を流して仕事していればほとんど滞在費は要らないで済むという仕組みなわけです。

以上が、ボランティアと研究会、茅葺屋根を保存するグループ、それから地元の人たちの間で地域通貨を回しているという「桃源」の例でした。

次に、東京でやっているアースデイマネーの例ですが、これと同じような仕組みが盛岡にもあります。街に来てごみ拾いをし終わった後に「C」という地域通貨をもらって、それが映画館で割引券として使える、あるいはどこかのカフェでコーヒーがちょっと安く飲めるというのですが、その本家と言いましよか、渋谷でやっているのがこのアースデイマネーです。

実は、そのアースデイマネーを渋谷で始めたのですが、やっているうちにいろいろ問題も出てきました。というのは、例えば1時間ごみ拾いに参加すると500アールというのを差し上げています。カフェでコーヒー一杯飲んで400円と100アール使っていくと、だんだん通貨がお店に溜まるという問題が出てくるわけです。お店に溜まると、お店の人の中には「割引クーポン

だからまあいいか」と構えてくれる人と「地域通貨なんだから、せっかくだから使わせてくれよ」ということが出てきます。そこで、お店にとっての通貨の使い道を工夫する必要があるわけですが、その一つの試みとして、都市と農村の交流に地域通貨を絡ませ、農作物を地域通貨で買えるようにすることで循環させるということにトライしています。

商店街活動費を地域通貨にした練馬区のニュー北町商店街の例をお話します。

お店の数でいうと50軒ぐらいの下町の商店街なのですが、商店街ではクリスマスになるとイルミネーションをすとか、花見の季節がくるとちょうちんを付けるといった活動をいろいろしています。イルミネーションであれば、その運営経費は1回30万円ぐらいとそう大した金額ではないのですが、従来はイルミネーションの設置作業を業者に委託していました。

そこで、ちょっとやり方を変えてみようということで、業者の方には申し訳ないのですが、地域の住民に参加してもらおうというやり方を取ったんです。地域の住民に呼びかけましてぜひ今度、いついつの何曜日の朝何時から、商店街のイルミネーションの取り付け作業をやりますので参加してください、と呼びかけたわけです。そうしたところ、街に対して何か貢献したいという方々が来てくれて、そして、そのお礼として地域通貨「ガウ」を払ったんです。これまでの委託費の予算がありますので、新しい出費になっているわけではありません。お金の使い道を変えて、イルミネーション設置と市民との交流の一石二鳥を狙っています。しかも、このやり方なら予算の30万円もかからなくて済むこともあります。

練馬の商店街の真横にはサティがドーンと建っているのですが、地域通貨「ガウ」はある意味サティ対策だったわけですね。ガウはサティでは使えません。

そうしますと、商店街活動費が地域の中で回っているということになる。しかも、ここで重要なことは、単に地域通貨として商店街活動費が回っているということが重要なのではなく、商店街と住民との間で新しい関係ができてきているということが重要なわけです。もちろん地域の中でお金が回るとことは重要なのですが、

今までにない顔の見える関係をつくっていると、いところには私は注目したいと思います。

地域通貨のつくり方

いくつか事例を紹介させていただきましたが、これらのことから言えることをまとめて申し上げますと、＜買い物 買い物＞のサイクルにとらわれないお客様との関係をつくるということではないでしょうか。

どうということかといえますと、形としては三角形以上の仕組みをつくりだすということではないかと思えます。今までお店とお客さんという形でやり取りをしてきたのであれば、そこに地元のNPOに参加してもらったらどうか、地元の学校に参加してもらったらどうか、あるいは農家に参加してもらったらどうかとか。

それで、最も簡単な、単純な地域通貨のつくり方について、私がワークショップなどをやったときには、こんな感じでいつもやります、その方法をご紹介します。

まず、地域にある資源、あの集落にある1本の枯れ木とか、どこの地域の山とか、何でもいんです。地元で思いつくものをすべて挙げてください。例えば、住民、農家、商店という3つが出てきますが、その横にそれぞれ問題点を挙げてもらいます。これが実は最初のステップですね。地元の資源と課題を洗い出すということです。この後に、ではこれをうまくつないでいきましょうというのが次のステップです。

農家だと何が出せるかという農産物が出せる。商店はその農産物を直接売ってもいいし、加工して提供してもいいし、いろいろな形で提供できます。個人は何ができるかと思ったら農家の農作業の手伝いができる。要するに資源をうまくつなげて、回るようなモデルをつくってみましょうということなんです。

地域通貨というのは地域通貨を回すことが重要なのではなく、実体と実体とをつなげていくということです。実体がつながればその反対方向に地域通貨は流れていくだけです。どうしても地域通貨の仕組みに目を奪われてしまうのですが、そうではなくて実体あるものを次々に回していくことが先決です。それらをよりうまく回すために地域通貨を使えば、より地域

内の財やサービス、資源などの循環がよくなると期待されるものです。

地域通貨づくりのポイントは、お金で表現できない価値を形にすることです。それでいて、具体的でわかりやすい価値を持たせることも必要です。

最初に申し上げるべきだったのかもしれませんが、私は今、西和賀でやっております「わらび」の地域通貨にかかわっています。1年前に湯田町に行って初めて講演をして、ちょうど1年目の今年18日にわらび通貨の素地となるわらび畑というのをつくりました。公私混同というか、来るのが楽しみという感じで来ていますが、この西和賀の地域通貨の場合は、地域通貨の価値をわらびに求め「わらび本位制」の地域通貨とした点がユニークなところなんです。

そして、この場合のターゲットはどこかという、外部から来る「助っ人ボランティア」です。スノーバスターズの活動などが有名ですがそれ以外にもまちづくりを手伝ってくれる人をよそから集め、参加したら地域通貨でお礼がされて、その地域通貨は地元の人たちのもてなしを受けるときに使います。そして、旅館や商店などがその地域通貨を受け取ったとしても、それは最終的にわらびに加工できるものですから、店にとってみれば、現金とは交換できないけれども、ある程度は納得ができる。しかも、地元住民ではなく外部からの来訪者が地域通貨を手にして、お店の側は受け入れられる範囲で受け入れていただくということで進めていきたいと思っております。

来年の1月からスタートする実験ですが、まだどうなるかわかりませんが、ご注目いただけて、もし、ご興味があればスノーバスターズなどにも参加していただけたら幸いです。

最後に、地域通貨の仕組みに目を奪われるのではなく、自分のお店だったら地域通貨を使って自分のお店らしいどんなことができるかな、ということにぜひトライしていただきたいと思えます。

本日お話をさせていただいたことが、地域づくりのヒントにしていただければ幸いです。

(この講演録は、去る03年10月28日に開催された中心市街地活性化研究会から紙面の関係上内容を抜粋し、掲載したものです。)